

第 282 回研究報告会（5 月 21 日）

「天理教のヨーロッパ布教の一考察—戦後フランスにおける文化・社会的背景との関連から」

加藤匡人

5 月の研究報告会では、天理教海外部員であり、ロンドン大学 SOAS 大学院宗教学科博士課程に在学中の加藤匡人氏が、天理教のヨーロッパ布教について研究報告をした。加藤氏は、ヨーロッパ布教とくにフランス布教に関して、いまだ本格的な調査を行う前の段階にあり、今後ヨーロッパ出張所等でインタビュー調査や参与観察を行う予定であることを断ったうえで、今回はすでに刊行されている資料によって、戦後のフランス布教と文化・社会的な背景との関連を明らかにしようとするものであった。そこで社会的背景として特に取り上げられたのは、1980 年代頃からの日本語需要の増加と反セクト（カルト）政策の昂揚である。そして、この背景が天理日仏文化協会の「文化活動」に少なからず影響を与えているとし、1980 年代には日本の表象との関連で天理教を捉える事例がヨーロッパ出張所の機関誌等に散見されることが指摘された。報告の後には、海外部からの参加者も含めて活発な議論が展開された。

（澤井治郎記）

第 283 回研究報告会（6 月 17 日）

「聖空間都市ベナレス」

堀内みどり

標記報告会では、「聖空間都市ベナレス」と題して報告した。Varanasi または Benaras (Kashi としても知られている) は世界で最も古い“生きている”都市のひとつである。ヒンドゥー教、仏教の聖地というだけでなく、その他の人々にとっても、ベナレスは聖なる空間である。ベナレスを語るいくつもの神話があり、ガンジス川、数多くの巡礼路が聖空間を幾重にも形成している。特に、ベナレスはシヴァの都として知られる。時間を操るシヴァは生死にかかわる神でもあり、死者の町としてのベナレスをより特徴づける。ガンジス川沿いの沐浴場（ガート）では、生きた人々が沐浴によって浄化され、死んだ人々が火（火葬）によって浄化されている。また、巡礼回路はベナレスの中心に位置するシヴァ寺院を中心にいくつもの円環を描き、また、巡礼路には多くの女神がベナレスを守るように祀られていて、こうした女神や小さな祠がベナレスのもつ神話の世界観を目に見える形にしている。定期的な巡礼には数多くの人々が集まる。そうした人々によって、ベナレスの聖空間は再生産されてきたともいえる。

第 285 回研究報告会（9 月 2 日）

「マックス・ウェーバーの業績の概観と研究動向」

深谷耕治

本報告会では、社会学の祖とされるマックス・ウェーバー（1864～1920）の業績について概観し、社会学の分野におけ

る最近の研究動向について簡単に報告した。ウェーバーの著作では『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1904）が有名であるが、それが儒教や仏教やヒンドゥー教など他の宗教も研究対象として含む広範な比較宗教研究の一部であることは周知の通りである。また、ウェーバーはそうした宗教研究に加えて政治、経済、法、都市、エスニシティ、芸術などさまざまな分野に深い洞察を残しており、ドイツ社会に対する時事的・政策的な著作・講演も多数行っている。本報告会では、そうした多様な著作群を一望できるようにレジюмеを作成し、彼の業績の概観を行った。

また、最近のウェーバー研究の動向としては、現代社会の分析に適用できるように彼の広範な業績をできるだけ体系的に継承しようとする動きが注目される。そうしたウェーバー社会学の現代化の動きは「ウェーバー・パラダイム」などと呼ばれて本国ドイツを中心に推し進められており、本報告会ではその簡単な見取り図を提示した。これらを踏まえて、ウェーバーの業績を自身の研究にどのように活かしていくのかがこれからの課題である。

第 4 回研究所出前教学講座に出講

金子 昭

9 月 2 日、沖縄教務支庁にて開催された標記講座に出講した。私に与えられたのは実践教学のテーマで、「天理教の教えから生命倫理について考える」という講題の下、天理教的生命倫理について取り上げた。平日の夜（午後 7 時半～9 時）の開催ということで、人数は決して多くはなかったが、参加者はみな熱心に聴講した。

講座は、(1) 天理教と生命倫理を考えるための諸前提、(2) 実践教学上の応用問題、(3) 陽気ぐらしのための医療とは、という内容の流れで進めた。

まず(1)では、医療技術の進歩は親神による知恵の仕込みの領域に属するが、実際にその治療的応用の範囲は修理肥としての医療の役割を逸脱することがあってはならないと述べ、その背景にあるかしの・かりもの心身観について触れた。

これを受けて(2)では、脳死・臓器移植問題と生殖医療技術の問題について、教理の立場から論点整理を行った。前者では、同じ教理から相反する結論が出る二律背反の事態が見られ、必ずしも全教で合意できる最終的結論があるわけではない（天理やまと文化会議による見解はある）ことを示した。後者では、

